

# 2022年度 入学試験問題

2月3日 第3回

## 国語（45分）

### 注意

1. はじめのチャイムがなるまで問題用紙には手をふれないでください。
2. 問題は2から11ページまでです。
3. 解答用紙には氏名でなく、受験番号を書いてください。
4. 解答はすべて解答用紙に書いてください。
5. おわりのチャイムがなりはじめたら、書くのをやめて、えんぴつをおいてください。
6. 句読点・記号は字数に数えます。
7. 本文は出題の都合上、一部変更しています。

三輪田学園中学校

一——1〜10のカタカナの部分で漢字に直しなさい。  
また、——11〜15の読み方をひらがなで答えなさい。  
つづけ字ではなく、一点一画をていねいに書くこと。

- 1 ゲイジユツの分野で成功する。
- 2 オランダな気候。
- 3 地球キボの問題を話し合う。
- 4 シュクシヤクの大きい地図を見る。
- 5 環境問題についてコウエンする。
- 6 参加者の意見をトウイツする。
- 7 ウチユウ飛行士にあこがれる。
- 8 彼の気持ちをサツする。
- 9 医者が子供の命をスクウ。
- 10 心の中で強くネンじる。
- 11 容器に入れて保存する。
- 12 横着な態度を改める。
- 13 雑誌の巻頭ページを編集する。
- 14 慣れない場所まで道に迷う。
- 15 話の内容を承る。

二次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

野球部を辞めた高校三年生の巖泰司は、学生時代に放送部に所属していた福田先生のすすめで、廃部になっていた放送部を立て直すことになった。三人の新入部員（赤羽・白瀬・南条）が集まり、放送部としての活動が本格的に始まった中、巖は、同年の野球部員が不祥事（不都合な事件）を起こし、野球部が夏の大会に出場できなくなったことを知った。以下に続くのは、チームメイトだった田代、森山と巖が今回の件について話をしている場面である。

「……部活は、これからどうなる？ しばらく活動停止か？」  
コロッケを食べ終え、店を離れる二人の背中に尋ねた。  
「※1 志村たちは退部したし、テスト明けには普通に部活あるよ。でも、今年は1他校との練習試合とかは一切なしだった」

「試合ないのはきついな。やる気なくすわ」  
「せつかく入った一年もどうかなあ。結構やめちゃう奴多いんだろうな」

「※2 高村も大変だ」

高村の名前が出て、2 無意識に歩幅を広くしていた。二人の隣に並び、なんで高村、と会話に割り込む。

「もう新しい部長が決まってるだろ？」

「そうなんだけど、丸々一年試合がないなんて状況初めてじゃん。新しい部長もどうしていいかわかんないんだろ。なかなかトレーニングメニューも決められなくて、結局高村があれこれ動いてる。一年生を引き留めるのも大変そうだし」

「せめて練習試合でもやらせてやれたら違うかもしれないけど」

二人の話を聞きながら、高村は動いているのだ、と思った。  
高校生活最後の一年、総括（まとめ）ともいえるこの時期に野球部員が不祥事を起こし、最後の大会に出られなくなったとわかって、高村は黙々と動き続けている。

きつと高村は、志村たちを非難することもしないのだろう。そんなことをしている暇も惜しいとばかり、黙々と新しいメニューを考える姿が目につかんだ。

3 俺だつて。

空っぽの右手を握りしめ、振りかぶるより先に声を上げていた。

「試合しよう」

二人が同時にこちらを見る。ぽかんとした顔をする森山の向こうで、田代が眉を上げた。

「試合って、誰と。他校との試合は全面禁止だぞ」

「じゃあ、野球部内で、紅白試合とか」

「盛り上がるんだろ、そんなの」

それはそうだ。部員同士で試合なんて緊張感に欠けて面白くもない。

もっと緊張する相手。できれば格上。そんな相手いるだろうかと口を閉ざしかけ、はっと顔を上げた。

「OB（＝卒業生）との試合は？ 卒業した先輩たちに声かけて、うちの校庭で試合するとか」

提案に、4 田代と森山の表情が少し動いた。

「まあ、それならギリセーフか？」

「試合ってほど大げさじゃなくて、先輩たちに練習見てもらうってことにすれば……。でも監督が納得するかなあ。試合がしたいってだけの理由じゃ——」

「だったら、放送部の練習につき合うって体にしたらどうだ。俺、放送部の部長になったんだ。今年から活動始めて、部員は俺含めて全員素人だから学校行事の司会進行なんかはまだ全然できない。だから、後輩たちに司会の練習とかさせてやりたいんだ」

「え、巖って今放送部なの？ なんで？」

俺だってわからない。こんなつもりじゃなかった。成り行きと言うのが一番正しい。でも赤羽さんや白瀬が真面目に頑張っていると応援したくなるし、南条さんが意外と素直に部活に参加してくれたのは嬉しかった。それに、高村が新しい部長と一緒に悩みながらも練習メニューを考えていると知ったら、5 俺だって、と思ったのだ。

「監督と、放送部の顧問の先生には俺から掛け合う。先輩たちの連絡も俺がする。全部俺が準備するから、野球部のみんなとも相談してみてくれないか」

二人に向かつて頭を下げる。

視界の端、側溝（＝道路のわきの溝）の隅に、6 茶色く変色した桜の花びらがしぶとく残っていた。

六月の第二土曜に野球部とOBチームの練習試合が行われることが決まると、朝の天気予報を7 しながら見守るのが日課になった。予報はずっと曇りをキープしていたが、前日になって天気が変

わるのは珍しくもない。

どうか降ってくれるなと祈り続けたかいがあったのか、当日は朝から薄曇り。降水確率は十パーセントだ。

そして迎えた土曜日の今日、まだ朝も早いが校庭にはすでに野球部員たちの姿がある。OBの先輩たちもちらほらやってきて、野球部の部室で着替えをするらしい。

先輩たちの中には懐かしい顔もあり、声をかけたくなる気持ちもあったがぐっとこらえた。こちらはもう野球部ではなく、放送部なのだ。

グラウンド整備をする野球员たちの横で、放送部は校庭の隅に三角屋根の白いテントを運び出す。赤羽さんと白瀬は校内から長テントを持ってくることになり、福田先生と二人でテントを立てながら、改めて今日の試合の札を述べた。

「今回は俺の思いつきにつき合わせてしまっすすみませんでした。野球部の説得にも協力してもらって、本当にありがとうございます」

先生は支柱パイプを組み立てながら、いやいや、と笑う。

「本気で好きなものになると、誰だって必死になるもんだからな」

どきりとして、差込口にパイプを嵌めていた手が止まった。

「俺は、別に……野球が好きじゃなく」

「ん？ ああ、お前のことじゃないよ。俺のこと」

福田先生は慣れた手つきでパイプを組み立てながら、照れたように笑った。

「放送部が再スタートして、なんだかんだ一番浮かれてるの俺だからさ」

支柱に天幕の紐を結び手に力がこもる。自分のことを言われたのかと思いい、真っ先に野球と口走ってしまった。勘違いに顔をしかめていたら、福田先生がのんきな声で「そうか。野球部に交渉しに行くとき、巖も連れていけば心強かったかもな」などと言いだした。

「めっちゃ怖かったんだぞ、ひとりで野球部行くとさ」

「……そうだったんですか？」

「ただでさえ野球部全体がピリピリしてたからな。でも放送部もようやく部員が揃って本格的に始動したところだったから、なんかイベントの司会でもやらせてやりたいなど思ってたところだったんだよ。だから頑張った」

頑張った、なんて子供みたいな言い草で、福田先生は天幕をかぶせたテントの屋根に手を置いた。

「ちよつとずつ部活らしくなってきたのが嬉しくてな。とつくに卒業したのに、未だに放送部が好きなんだ」

馬鹿みたいだろ、なんて続きそうな言葉だったのに、福田先生の目元に浮かんだ笑みはどこか自慢げだった。8 宝物を見せびらかされたような気分になって、自然と視線が落ちる。

(中略)

グラウンドが整い、放送部も準備を終え、時刻が九時近くなると着替えを終えたOBたちがばらばらと校庭に出てきた。その多くが数年前に卒業したばかりの大学生だ。大学の名前が書かれたユニフォームを着ている先輩も多い。卒業後も野球を続けているのだろう。九時を少し過ぎ、いよいよ赤羽さんがテントに設置されたマイクの前に座った。その隣には白瀬と、福田先生の姿もある。

俺と南条さんは音響のチェックをすべく、テントから少し離れたところでその様子を見守った。

赤羽さんがマイクのスイッチを入れると、校庭に設置されたスピーカーからサーツという音が流れてきた。

『チェックワンツ、チェックワンツ』  
ノイズ(雑音)はない。ハウリング(不快な音の反響)もない。

9 赤羽さんの高い声が曇り空に響く。

福田先生に何事か声をかけられ、赤羽さんが小さく頷いた。手元の資料に視線を落とし、軽く息を吸い込む。

『水野瀬高校野球部、OBチーム、両チームのキャプテンは、メンバー表を持って本部テントまでお越しください』

すぐに野球部の二年——多分新しい部長だろう——と、OBがテントまでやって来た。メンバー表を白瀬が受け取る横で、赤羽さん

はアナウンスを続ける。

『両チームの選手はベンチに入り、ウォーミングアップの準備をしてください。先攻のOBチームはトスバッティングを、水野瀬高校野球部は、キャッチボールを開始してください。時間は七分間です』  
事前に練習していたのだろう。赤羽さんの落ち着いた声と独特のイントネーション(声の上がり下がり)は、実際の試合前にグラウンドに流れるアナウンスとよく似ていた。

(中略)

ウォーミングアップが終わり、再び赤羽さんの声が校庭に響いた。『お待たせいたしました。水野瀬高校野球部、OBチーム、両チームのスターティングメンバー、並びにアンパイヤー(審判員)の紹介をいたします』

先輩たちがシートノックを始めた。赤羽さんがメンバーの背番号と守備位置、名前を読み上げる。10 試合だ、と思ったら背筋に震えが走った。自分が出場するわけでもないのに血の巡りが速くなって、ざわざわと皮膚の下が落ち着かなくなる。

審判は野球部の監督だ。「プレイ」の声がかかって試合が始まる。先攻はOBチーム。大学名の入ったユニフォーム姿の打者がバッターボックスに立つ。

初球は見送り。二球目はファウル。  
そろそろ大きな当たりが来るんじゃないかと

三球目、ストレートを打たれてベンチからわつと声が上がった。自分も口を開きかけて、慌てて閉じる。

試合が進むにつれて薄雲の間から日が射してきた。梅雨入りしたばかりのこの時期、たまに射す日差しは思う以上に強い。校庭には日差しを遮る陰もなく、南条さんは額の上に掌を添えて眩しそうにしている。

マイクの音量も問題なさそうだし、南条さんにはテントに戻ってもらい、一人その場に残って試合を見詰めた。やはりと言うべきか、野球部はボコボコに打たれている。OBたちも手加減なしだ。一回の表ですでに四点取られたが、ベンチにいる野球部員たちは全く落胆

した(Ⅱがっかりした)顔をしていなかった。11 むしろ楽しそうだ。ベンチは二年生が中心だ。高村の姿もある。高村はスタメンではなかったが、途中交代もあるだろうか。あいつなら、先輩たちの球も打ち返せるのではないか。

「巖はなんでこんなところから一人で試合眺めてんだ？」

突然声をかけられ、しかもそれが覚えのある声だったので、反射のように背筋を伸ばしてしまった。振り返れば思った通り、後ろに12 谷津先輩が立っている。夢中で試合を見詰めていたせいで、背後から近づいてくる気配に気づかなかった。

谷津先輩は二学年上で、一年のときお世話になった。大声を出すタイプではなかったが、吊り上がった細かい目で睨まれると怒鳴られるよりよほど怖かったものだ。

先輩はユニフォームではなくジャージを着ている。今日は試合に参加しないのだろうか。俺の視線に気づいたのか、先輩が踵で軽く地面を叩いた。

「ちよつと足首痛めて、今日は見学」

「怪我してるのに、わざわざ来ていただいてありがとうございます」

「いいよ、そんな堅苦しくしないで」  
谷津先輩は笑って俺に肩をぶつける。気安い仕草に驚いた。在学中はあまり先輩と戯れるようなタイプではなかったし、一年生に向かつて笑いかけることもなかったのに。

「どうした？」

「一年のときは先輩……めっちゃ怖かったんで、別人みたいで」  
「怖かった？ マジか、よかった。監督からさんざん『お前は気の抜けた顔してるから後輩に舐められるなよ』って言われてたからさあ」

「いや……怖かったっす……」

先輩は俺の隣に立ち、試合を眺めながらのんびりした口調で言う。「先輩なんて後輩にビビられてなんぼだからさ。なんだかんだ人間って、怖い人の言うこと聞くじゃん。優しく指導してたらきつい練習とか絶対手え抜くでしょ。強くなつてもらうためには、嫌われてもしようがないと思って。でもあんまり厳しくし過ぎるとやめちゃ

う奴もいるから、さじ加減が難しくくてな。発破かけよう(Ⅱはげまそう)として無茶なこと言ったりもしたけど、巖は文句も言わずに黙々と努力してたから偉かったよな」

在学中、一度も褒められたことのなかった谷津先輩に褒められて息が止まった。

「……そう、ですかね」

「一年の中でも特に根性あるなあと思ったよ。いつも最後まで残って、用具片づけて帰ってただろ？」

まさか誰かに見られていたとは思わず、相槌も忘れて谷津先輩を凝視してしまった。

先輩たちが帰った後、用具を片づけるのは一年生の仕事だ。俺は片づけを一人で引き受け、他のメンバーが帰った後も今日の練習の反省をしながらバットを振り続けた。努力を続ければ何か変わると信じて、小さな変化が生まれるのをひたすら祈った。

きつと、ささやかな変化はあったはずだ。でも13 高村のような選手が近くにいたおかげで、自分自身のちっぽけな変化を喜べるだけの余裕がなかった。

焦ってバットを振る自分が、自分でも滑稽に思えた。誰かに見られたら指をさされて笑われるだろうと思っていたその姿を、まさかこんな形で認められるとは。

14 ずつと力を入れればなしたった肩から、すうつと力が抜けた。高校時代は一度もレギュラー(Ⅱ試合開始時の出場選手)にはなれなかったし、部長になることも叶わなかったし、最後は野球部もやめてしまった。小学校から続けてきた野球にこんな形でピリオドを打って、何も残せなかったとぼんやり思ったけれど違うのかもしれない。

少なくとも、鬼のように怖かった谷津先輩が認めてくれたのだ。それだけで、十分報われた気がした。

グラウンドに歓声が上がると、野球部がヒットを打った。隣で谷津先輩が「おい、打った打った」とのんきな声を上げる。

「今日の試合、計画してくれたの巖なんだって？ 放送部として」

その一言で、ぎくりと背筋が強張った。

青ざめた俺の横顔を見て、先輩は「b」を立てて笑う。

「別に野球部やめたからってどついたりしないって！」

「……はい、でも、すみません」

「なんで謝るんだよ。いいじゃん、好きなことやったら」

先輩が頭の後ろで両手を組む。相変わらず髪は短く刈られているが、こちらを見る目は以前より格段に穏やかだ。その目がどこか眩しそうに細められる。

「だってお前、まだ高校生なんだから。いいなあ、これからいろいろ選べて」

いいなあ、と、心底羨ましそうな顔で先輩は言った。

でも俺はもう、三年だ。受験まで一年を切っている。そろそろ将来を見据え、志望大学だつて決めなければいけない。

日に日に進路が狭められ、崖っぷちに立たされているような気分でしたのに、大学生の谷津先輩から見ると俺は「まだ」高校生で、随分自由に見えるらしい。

ひとつ瞬きをして、試合を続ける選手たちに目を向けた。

野球部に交じってボールを追いかけるOBは、俺たち高校生より一回り体が大きくて、もうすっかり大人のように見える。

でも俺が大学生になったら、今度は先輩たちが社会人になっていて、そのときはやっぱり「まだ大学生なんだから」なんて言われるのだろうか。

15 こんな気持ち、もしかすると一生経験するのか。

ボールが三遊間を抜け、わあっと歓声が上がった。風が吹いて、遠くで聞こえる声が一瞬で耳元に迫るような錯覚の後、唐突に悟った。

「まだ」は延々と繰り返される。

「もう」遅いなんてことは、もしかするとないのかもしれない。

試合が終わったのは、正午を少し回る頃だった。

最初こそOBに点差をつけられた野球部だったが、後半は開き直

ったのか急に動きがよくなって、九回裏は野球部の逆転勝利もあり得る怒濤の攻勢（＝激しい攻め）だった。

試合結果は、七対五でOBチームの勝利。

最後に両選手がベンチ前に整列した。互いに向かい合い、礼をする。

俺はそれを、放送機器の置かれたテントの下から見ている。野球部員たちの、悔しい、と、楽しかった、が入り混じった顔を、遠く眺める。

OBたちが監督と一緒に部室へ向かい、残った野球部員たちがグラウンド整備を行う。放送部も撤収作業を行っている、ユニフォームを着た野球部員が近づいてきた。高村だ。

高村はまっすぐ俺を見て「ちよつといいか？」と声をかけてくる。そばにいた福田先生に目を向けると、軽く頷き返された。

テントを出て、高村とともに校庭の隅へ向かう。グラウンドを整備する野球部員たちの声が薄く響くその場所で、高村はゆつくりと足を止めた。

「今日の試合、ありがとな」

「……別に、俺は何も。アナウンスも一年に任せっぱなしだったし」

「OBとの試合を提案してくれたことだよ」

野球部にいた頃、高村とどんなふうにも話をしていたのか思い出せない。高村が部長に立候補した辺りからぎくしゃくして、会話が減っていたせいもある。

軽く息を吸って、緊張ごと吹き飛ばすように鋭く吐く。

「俺は」A「、野球部のみんながこの話に乗ってくれると思わなかった。部活やめた俺の話なんて、聞き流されるかもしれないと思つたから」

「聞き流さないだろ。こんな面白そうな話持ちかけといて、そんなネガティブ（＝消極的）なこと考えてたのか」

横目でちらりと高村を見る。ユニフォームが真っ白だ。高村は、今日の試合に結局一度も出なかった。貴重な機会を先輩たちに譲つたのかもしれない。

俺の視線には気づかぬ様子で、高村はグラウンド整備をする野球部員たちを見て目を眇めた（＝目を細めて見た）。

「巖が部活やめるって聞いたときは『どうして』って思ったけど、お前の選択もアリだったのかもな。【B】、こんなことになると思わなかった」

高村から **c** を逸らし、俺も、と呟く。

もしかしたら、今年の夏の大会は例年と違う結果になるかもしれない、とは思った。でも、こんな結末は予想していなかった。

「高村は夏まで野球部続けるのか？」

「続ける」

即答だった。

まっすぐな声に **d** を押され、長く口にできなかった疑問を言葉にした。

「去年、16 なんて部長に立候補した？」

これにはすぐに返事がなかった。目の端で高村が口を引き結ぶのがわかる。答えるつもりはないのかもしれない。だから、これは全部俺の想像だ。

「俺が部長になったら、もう絶対レギュラー目指さないと考えたからか？ 部長の仕事をまっとうする、なんて言い訳して、俺が自主練減らさないようにしたんじゃないか？」

去年、俺はかつてなくレギュラー争いに躍起になった。高村が四番打者兼部長なんてポジションをかつさらっていったことに腹を立て、だったら【C】俺もレギュラーになってやるとがむしやらに練習に打ち込んだ。

小学生の頃からずっと野球を続けていたが、周りを押しつけてまでレギュラーになるうなんて思ったのは初めてだったかもしれない。スムーズに部長になっていたら、あんな激しい渴望（＝心から望むこと）を知ることなかった。部内の調整で手いっぱいになって、選手としてはひたすら無欲になっていただろう。

谷津先輩も言っていた。強くなってもらうためには嫌われるのも仕方がないと。高村は、その役を買って出てくれたんじゃないだろう

うか。

高村は【D】黙り込んだ後、帽子のつばを軽く引いて俯いた。「……そのつもりだった。お前が野球やめるなんて、思ってもなかった」

「ごめん、と小さな声が続く。」

謝ってほしかったわけじゃない。でも、高村の本心を耳にしたことで、胸にわかかまっていたものがようやく溶けた。尋ねればこんなにもあっさり答えが返ってくるのに、頑なに高村に背を向け続けていたことを今更悔やむ。

強い風が吹いて、頭上を覆う薄い雲がゆっくりと動く。そのとき、

テントから悲鳴のような声が上がった。見れば白瀬が紙束を取り落とし、それが風に煽られテントの外へ吹き飛ばされていく。南条さんが面倒くさそうに足元に散らばった紙を拾い、マイクの前にいた赤羽さんも身を翻す。

赤羽さんがテーブルに体をぶつけた瞬間、低いノイズが校庭のスピーカーから響いた。何かのはずみでマイクの電源が入ったのかもしれない。

テーブルの上のマイクが倒れ、次の瞬間、校庭中にあの異音が響き渡る。

グラウンド整備をしていた野球部員たちが手を止めた。俺もその場に棒立ちになる。二年の終わり、校庭に響き渡った大きな異音に意識を奪われたときのよう。

ろくに放送委員会も活動していなければ、放送部もなかったうちの学校では、職員室からの呼び出しやチャイムの音を除けば、滅多にスピーカーから音が流れることはない。

だから動けなかった。あれは非日常の音だ。マイクの電源を入れた瞬間聞こえるあの音。周囲の空気を不思議と張り詰めさせるあの音を聞いた瞬間、球場のアナウンスを思い出した。

直後校庭に響き渡った大音量。空気が震えるようなそれを聞いて思い出したのは、ヒットを打った瞬間スタンドから沸き上がる歓声だった。

一瞬で意識を持っていかれた。胸を掴んだのは試合中のあの高揚感（＝気分が高まる感覚）だ。

でも自分は、とっさにその事実を否定した。小学生のときに父親からグローブを買ってもらって、それでなんとなく続けていただけで、野球になんてもう未練はない。それほど野球が好きだったわけでもないのだから。だから、こんな音に球場の歓声を重ねて動けなくなるはずがないのだ。

そう、思いたかった。だってもう、戻れないのに。

「すっげー音」

高村が耳の穴に小指を突っ込んで笑う。なんだか久しぶりに高村の素の声を聞いた気がした。

隣にいる高村は野球部のユニフォームを着て、俺は制服を着ている。

もう戻れない。俺は野球部をやめてしまったし、今や放送部の部長だ。

でも、17 自分についていた嘘を訂正するのに「もう遅い」なんてことはないんじゃないか。

グラウンド整備をしていた野球部員が、こちらに向かって大きく手を振る。野球部の新部長だ。

志村たちの一件があった後、高村が新しい部長と一緒に練習メニューを作っていると聞いたとき、俺だって、という言葉が喉元までせり上がってきた。あの言葉の続きが、今ならわかる。

もう夏の大会には出られない。他校との試合もできない。それでも必死で部員たちのためにメニューを作る高村の気持ち痛みほどわかった。

わかる、高村。俺だって。

「俺だって、野球好きだ」

好きだからずっと続けていたし、必死だったのだ。

高村は何も言わない。黙って隣に立っている。

わかってる、というように高村が頷くのが目の端でちらりと見え、急速に視界が滲んだ。それをごまかすように、大股でテントへ

向かう。

高村はついてこない。高村と俺はもう、戻る場所が違う。

18 一つの間にか右手を握りしめていた。いつもの癖だ。握り込んだのはなんだろう。胸の中がめちゃくちゃで判別がつかない。でも、嫌な気分ではなかった。

右手を握って振りかぶるのは、考えたくもないことを頭の外に放り出すための動作のつもりだった。でも握りしめていたのは嫌な気持ちばかりじゃなく、上手く言語化できない、言葉になる前の気持ちそのものだったんじゃないか。

自然と歩調が速くなる。立ち止まり、背後の高村を振り返った。

高村はまだ同じ場所に立って俺を見ている。

その顔を見たら、思うより先に体が動いた。片足を後ろに引き、右手で何かを握りしめ、両手を大きく振りかぶる。

俺が両手に何も持っていないことは高村もわかっているはずだ。でも条件反射なのか、胸の前でミットを構えるようなポーズをとった。

持て余す気持ちを、どこかに捨てるのではなく、届きたい、と初めて思った。

空に向かって手首を振れば、高村の視線が上を向く。

「オーライ」

19 フライをキャッチするように、空に向かって高村が手を伸ばす。放ったのは、色も形もないものだ。でもそれを、受け止めてくれたら俺は嬉しい。

高村。またいつか、今度は本物のボールを使って、一緒にキャッチボールをしよう。

（青谷真未『水野瀬高校放送部の四つの声』早川書房より）

※1 志村：野球部員。不祥事を起こした中心人物。

※2 高村：野球部元部長。高校一年の春休み、同学年の巖が野球部の部長になりたいことを知りながら部長に立候補し、選ばれた。



問 1

——1 「他校との練習試合とかは一切なし」とありますが、この状況で困ることは何ですか。適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 新入部員が先輩を恐れなくなり、チームの一体感がなくなる。
- イ 新入部員が、やる気をなくしてやめてしまう可能性がある。
- ウ 新入部員が多く、これ以上入部希望者を受け入れられない。
- エ 新しい部長が、他校のやり方を参考にして活動予定を組めない。
- オ 新しい部長が、過去のやり方を参考にした計画を立てられない。

問 2

——2 「無意識に歩幅を広くしていた」とありますが、  
① 巖を「無意識に」動かしたものは何ですか。本文から五文字でぬき出しなさい。

- ② 「歩幅を広くしていた」のはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。
- ア 田代、森山からこれ以上嫌われたくなかったから。
- イ 田代、森山に追いついて話題を変えたかったから。
- ウ 田代、森山に自分が野球部に必要だと伝えたかったから。
- エ 田代、森山に追いついて二人の会話に入りたかったから。

問 3

——3・5 「俺だって」とありますが、次の文はこの場面をふまえて巖の心情についてまとめたものです。( ) 1 3に入る適当な言葉を、それぞれ本文から二字でぬき出しなさい。

- 1 ( 一 二 字 ) 部の練習につき合うという形でOBとの
- 2 ( 一 二 字 ) を組むことにより、野球部・放送部の両方に活動の場を提供し、それぞれの部の ( 一 二 字 ) のために役立ちたい。

問 4

——4 「田代と森山の表情が少し動いた」とありますが、この時の二人の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア そんな考えもあつたのか。
- イ 大きなお世話だ。
- ウ どうせ無理に決まっている。
- エ さすがは巖だ。

問 5

——6 「茶色く変色した桜の花びらがしぶとく残っていた」とありますが、これは巖のどのような気持ちと重なりますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 活躍の時期はまだ先だから、じっと待つことが大事だ。
- イ 活躍の時期は今だから、やりぬかなければならない。
- ウ 活躍の時期は終わりに近いが、あきらめずにやり通したい。
- エ 活躍の時期は終わったので、きつぱりと身を引くべきだ。

問 6

7 にあてはまる四字熟語として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 一進一退
- イ 一喜一憂
- ウ 一挙一動
- エ 一期一会

問7 — 8 「宝物を見せびらかされたような気分になって、自然

と視線が落ちる」とありますが、

① 「宝物」は何を表していますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 福田先生が、学生時代に放送部の友人と築いた固い友情と信頼関係。

イ 福田先生が、教師を指すきっかけとなった放送部顧問との出会い。

ウ 福田先生が、思い通りにならず苦しんでやりぬいた放送部での活動。

エ 福田先生が、学生時代と変わらず放送部に持ち続ける熱い気持ち。

② この時の巖の様子としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あわれんでいる イ うらやましがっている  
不機嫌になっている エ 憂鬱になっている

問8 — 9 「赤羽さんの高い声が曇り空に響く」とありますが、赤羽さんの事前準備を巖が評価していることがわかる一文を本文からぬき出し、はじめの六字で答えなさい。

問9 — 10 「試合だ、と思ったら背筋に震えが走った」とありますが、なぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 野球部時代の嫌な思い出がよみがえり、恐ろしくなったから。  
イ OBチームに現在の野球部が勝てるかわからず、不安だから。  
ウ 元野球部として、試合に臨む際の緊張感を思い出したから。  
エ 本来なら自分も試合に出場する立場だったと後悔したから。

問10

□ a k d に入る言葉として適当なものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。(同じ記号は一度しか使えません。)

ア 背中 イ 鼻 ウ 目 エ 手  
オ 声 カ 足 キ 息 ク 唇

問11

— 11 「むしろ楽しそうだ」とありますが、なぜですか。十五字以上二十字以内で答えなさい。

問12

① — 12 「谷津先輩」とありますが、巖から見た高校時代の谷津先輩の巖しい様子が、具体的に描かれた部分を、本文から四十五字以上五十字以内の一文で二か所探し、それぞれ最初の五字でぬき出しなさい。

② 谷津先輩はどのような目的があつて後輩に厳しく接していたのですか。解答らんにあうように、本文から十字でぬき出しなさい。

問13

— 13 「高村のような選手」とありますが、巖にとつて高村はどのような選手ですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 誰よりも努力家で練習熱心な選手。  
イ リーダーシップも実力も備えた選手。  
ウ 後輩に試合出場の機会を譲る優しい選手。  
エ 先輩にかわいがられる明るい選手。

問14

— 14 「ずっと力を入れっぱなしだった肩から、すうっと力が抜けた」のはなぜですか。三十字以上四十字以内で答えなさい。

問15 — 15 「こんな気持ち」の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 先輩からは今後の選択を慎重にするべきだと言われるが、自分ではまだ自由に経験をする機会があると期待する気持ち。  
イ 自分も先輩同様に成長するチャンスが与えられているとわかりながらも、自分だけが成長できていないとがっかりする気持ち。  
ウ 自分だけは他の人とは違う生き方をしようと決断したものの、先輩からは他の人との差を認めてもらえざれつたい気持ち。  
エ 先輩からはこれから新たな可能性を見いだせるとうらやましがられるが、自分では後がないように感じられ、不安を消せない気持ち。

問16 【A】AとDに次のア～エをあてはめ、記号で答えなさい。  
(同じ記号は一度しか使えません。)

ア まさか イ しばし ウ せめて エ むしろ  
問17 — 16 「なんで部長に立候補した？」とありますが、当時の高村の考えを三十字以上三十五字以内で、解答らんにあうように答えなさい。

問18 — 17 「自分について嘘」とは具体的にどのようなものですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 野球はなんとなく続けていただけで、そこまで好きだったわけでもない。  
イ 野球が好きだったのは小さい頃の話で、今では放送の方に興味がある。  
ウ 野球を始めたきっかけは父だったが、高校生の今は親の影響など関係ない。  
エ 野球になんて関わりたくないし、今回の不祥事は絶対に許せない。

問19 — 18 「いつの間にか右手を握りしめていた」とありますが、

① 巖が「右手」に握っているつもりのもは何ですか。本文から六字でぬき出しなさい。

② ①には何がこめられていましたか。 — 18以降の本文から十字でぬき出しなさい。

問20 — 19 「フライをキャッチするように、空に向かって高村が

手を伸ばす」とありますが、高村のとった行動はどのようなことを表していますか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 巖がまた野球部に入ってやり直そうとしていること。  
イ 野球があればいつでも仲直りできるということ。  
ウ 高村が巖のことを許したということ。  
エ 二人の間のわだかまりがほぐれたこと。

問21 本文の表現について説明したものととして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 白瀬や南条といった部員の視点からも巖の様子を多く語ることで、巖の人物像が具体的にわかりやすく表現されている。  
イ 会話文以外にも巖の気持ちをくわしく描写することで、場面や時間の経過に応じた心情の変化がとらえやすくなっている。  
ウ 福田先生の愉快な様子やエピソードをはさみこむことで、巖の悩みの深刻さを際立たせた構成になっている。  
エ 臨場感のある音の表現や色彩豊かな場面の描写をすることで、巖たちの若々しさや青春の光と影を表現している。